

# 第19回 藤枝市総合教育会議議事録

令和3年10月21日

藤枝市教育委員会

# 第19回藤枝市総合教育会議教育委員会

令和3年10月21日(木)  
市役所西館3階 特別会議室

1 開 会 午前10時30分

2 協議事項

(1) with コロナ・After コロナにおける学校教育の取組みについて

①一人一台タブレット端末の活用について

②安全・安心で楽しい学校給食に向けて

3 構 成 員

職 名		氏 名
市長		北村 正平
教育委員会	教育長	中村 禎
	委員(教育長職務代理者)	山田美穂子
	委 員	牧田 伸明
	委 員	野中 進
	委 員	永田奈央美

4 出席した事務局職員

教 育 部 長	安達 剛正
教 育 政 策 課 長	杉原 一行
学 校 教 育 監	梶川 佐知子
主 席 指 導 主 事	安藤 厚志
学 校 給 食 課 長	杉本 尚仁
指 導 主 事	田中 裕史
	学校給食管理係長 河波 明
	総 務 係 長 田中 英忠
	書 記 谷光 美和

5 傍 聴 者 4人

6 意見の概要 別紙のとおり

7 閉 会 正午

## ○市長あいさつ

まずは教育行政にも大きな影響を及ぼしている新型コロナウイルスの話題を取り上げたい。国では10月17日現在ではあるが、ワクチンの2回目接種率が65歳以上では90%を超え、全体でも61%を超えた。本市では10月17日現在で、ワクチンの2回目接種率が65歳以上では93%を超え、全体でも61%を超えている。その効果もあってか、ここ2週間ほど、全国的に、新規感染者数が下げ止まり、本市においても10月9日以降、陽性者の発表はない。また、9月7日から、12歳以上の接種受付も始まり、10月10日現在で25%の中学生以下の児童生徒が1回目の接種を終え、64%以上の児童生徒が予約をしている状況である。インフルエンザなどの感染症が流行する冬に向け、新型コロナウイルスの第6波に備え、引き続き感染予防対策を怠らないよう、先日市民に向けた藤枝市新型コロナウイルス感染対処方針を示した。学校の教育現場においても、様々な教育活動に影響はあると思うが、学びの保障を維持するとともに、感染対策を徹底していく。

現在来年度の予算編成をしているところであるが、「教育日本一」を掲げる本市として、引き続き、学校現場において、学校生活支援員の継続配置や、図書館司書、ALTの配置など、学校の環境整備を進め、児童生徒、そして教員サポートの継続などに重点を置いた予算を配分していきたい。教育委員の皆さんにおいては、先月から学校訪問や、給食センターの視察など現場に足を運び、ご意見を頂戴し、校長からは学校経営の参考になっていると聞いている。

本日の協議内容は、本市がコロナ禍であっても、教育活動を積極的に進めていくために、2つの協議事項について教育委員の皆さんと意見を交わしたい。

総合教育会議は、市長と教育委員会が教育政策について協議・調整する会議であり、皆さんからの意見はできる限り取り上げ、教育行政の充実のために活かしていきたい。

限られた時間での協議となるが、皆さんの忌憚のない意見を聞きたい。

## ○協議に関する意見

(1) with コロナ・After コロナにおける学校教育の取組みについて

①一人一台タブレット端末の活用について

市長：昨年度、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、約1か月の休校となり、子どもたちの学びを保障するため、国は、GIGAスクール構想の実現に向け、前倒しで実施した。本市は、ICTを活用したまちづくりを進めていくなかで、市内の小中学校にも、電子黒板などタブレット端末を活用した授業ができるよう、先駆的に導入している。これは、私は、一にも二にも人材育成が大事であると考え、特に学校教育には力を入れており、ALTや特別支援教育支援員、生活支援員などを充実させ、子どもたちの確かな学力と豊かな心の育成を図っているからである。コロナ禍により、教育現場も大きく変容を迎える中、タブレット端末などICT機器

を活用し、本市がさらに一歩も二歩も先に行く教育に向け、皆様からのご意見を伺いたい。

教育長：毎年学校訪問しているが、各学校とも、かなり授業でICTを活用するようになったと思う。夏休み延長が終わり、リモートでの対応も始まるのではという危機感もあったのか、かなり力を入れているなど感じた。タブレットの持ち帰りが課題として挙げられたが、学校訪問時に永田委員より教科書の該当部分を写真に収め、教科書を学校へ置いて行ってもよいのではというアドバイスもいただいた。今後の課題もいくつか出ているが、この後話し合っていきたい。

市長：現在教育委員が学校訪問していると聞いている。県知事も藤岡小へ訪問したように、実際に足を運んで現状を把握し課題を洗い出し、ご意見をいただきたい。

永田：学校訪問した感想と今後の対応についての提案をいくつかお話ししたい。タブレットを利用している印象はあるが、活用しているまでは至っていないと感じる。黒板上に学習のストーリーがあって、その一部で単発的にタブレット端末を利用しており、タブレット端末の中で学習する児童生徒にとって学習の体系が頭に入っていないのではないかと感じた。まずはそうならないように、教師が子供たちに現在位置を確認できるよう提示するなど工夫して理解させることが必要である。まだ、まずは慣れるという段階であるかもしれないが、端末にはいろいろなことができるソフトが入っているので、なぜ今この学習をしているのかを理解しながら進むべきである。教師が生徒と同じ画面を表示するのではなく、生徒の意見を集約し、可視化した画面を生徒に提供するなど、良い活用法をしている教師もいた。そして、次のステップが、タブレット端末を活用した協調学習させていくことであると思う。アフターコロナにおいて、オンラインでコミュニケーションが図れることが大切である。最後に学習履歴やデータを活用して、分析し、子供たちがどんな学習活動をしているかにより今後の指導に役立ててもらいたい。

市長：子供はもちろんだが、教師もタブレット端末を活用できるよう取り組んでいくことが大事である。教える側のレベルを上げてもらいたい。使いこなさなければ意味がない。

牧田：コロナ禍にあつて、保護者もオンライン授業の必要性を望む声が高まっており、教師も必要性を感じてタブレット端末を活用していると学校訪問で感じた。教科の特徴のあった使い方が教師の課題であると感じた。文科省も研究はしているが、まだ簡単な使い方のみを提示する程度である。タブレット端末を単に個人の追究のみで利用するのではなく、オンラインによりみんなとの関わりを強めたり、高めたり、授業の理解を深めたりするよう、教師の研究も進めていると感じた。学年間、学校内、そして学校間に使用方法など情報交換をしていってもらいたい。

山田：数年前と比べてタブレットの利用法がだいぶ変わった。前から準備して

いた本市でさえこのような状況であることから、他市で混乱しているのではないかと思われる。タブレットの利用は、休校の対応としてリモート授業ができると保護者に思われている感が強いが、それは非常時の利用法であり、効果的に授業を進めるツールの一つとして活用されるべきものである。登校しづらい子どもが配信による授業を受けることで登校できるようになった例もあると聞き、そういう子たちへの活用ではリモート授業もよいが、配信があるから学校に行かなくてよいというわけではないと思う。学校でタブレットを使う理由をきちんと保護者へ理解してもらおうことが大切である。

市長：チャットによる痛ましい事件があった。本市では制御しているとのことであったが、現状はどうか。

田中指導主事：町田市で起きた事件かと思われるが、本市もパスワードはこれまでは利便性を重視し、学校ごと形式のものを配布していた。しかしながら、現在は操作に慣れてきたと思うので、10月に個々で設定することで、乗っ取りなどの危惧はないと考えている。

野中：これまで16校学校訪問した。各児童生徒が操作に慣れてきたと大変感じた。教師はこれまで、子供の机のまわりをまわって、理解に努めていたが、タブレットにより手元で子供の考えがわかり、これはと思った児童生徒に発表させるような授業が多かった。理解できないこの察知もできるようになったのではと感じる。

市長：タブレットの利用により、不登校者が登校するようになったという事例は全国的に聞いている。副次的な効果であったと思う。また、道徳は人であり、オンラインでは教えられないと思う。教師自身が自分を磨くことが大切である。本市からノーベル賞を受賞するような人材を出したいとよく話すが、能力のある子供はタブレットを駆使してどんどん利用してもらいたい。一方、特別支援学級の子供にはその子に適したタブレットの使い方を研究していく必要があると感じる。

教育長：課題は教育委員が述べてくれたが、教員自身、その課題を把握して解決に向けて取り組んでいる。消費者教育においては、スマホアプリとタブレット端末を活用するなど取組みが進んでいる学校もある。進んでいる学校の中で教師に余裕のある大規模校では、担任をもたさず、ICTリーダーとして、全学年に対応する教師を置いていた。

市長：効果があるのなら、予算も組むので、ICTリーダーを置いてもらいたい。教員の資質の向上が一番重要とわかる。教え方で子供は相当影響する。教員に負担ばかりかかるのではないけなが、藤枝の教員になってよかったと思えるよう、また、他市を寄せ付けなくらいに、ICTを駆使した授業となるよう技術を徹底してもらいたい。

(1) with コロナ・After コロナにおける学校教育の取組みについて

②安全・安心で楽しい学校給食に向けて

市長：学校給食を議題として取り上げるのは今回が初めてである。取り上げた理由としては、コロナ禍により、子どもたちが日々楽しみにしている学校給食を取り巻く環境も変化しており、これまで以上に食育が大切なものとなっているからである。子どもたちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけ、健全な食生活を実践できる力を育めるよう、学校においても積極的に食育指導に取り組んでいただいているが、食物アレルギーやコロナ禍における食育活動について課題もある中、安全・安心で楽しい学校給食に向けて、教育委員の皆さんのご意見を伺いたい。また、現在、新学校給食センター建設に向け、基本構想と基本計画を策定している最中であり、ソフト面の充実も含め、教育委員の皆さんのご意見も反映していきたい。

教育長：給食の時間がコロナ前に比べ、子供たちにとって楽しみが半減している。インフルエンザの時も同様の対応をした経験はあるが、長期化して給食を黙々と食べることが当たり前になり、おしゃべりすると注意される環境は大変異常であると感じる。一方、感染症と併せて、なぜこういうことが大事なのか、こうしなければならないのかを子供たちに指導していく場としたい。食物アレルギーを持つ子供の対応については、インクルーシブ教育の一つであると考えている。

市長：コロナ禍において飯缶給食が開始されたが、その状況はどうか。

学校給食課長：夏休み明けから開始。子供や保護者からはふっくらおいしいご飯になったということで評価されている。ご飯が楽しみで学校へ喜んで通うという投稿もあった。

市長：しゃもじでよそうにあたっての感染症を心配する意見はないか。

学校給食課長：クラスによってはご飯をよそう子を決めて、もらう子と接触の内容に対応している。

市長：親の心配があるのかなと思っている。

山田：先日給食センターを視察し試食もさせていただいたが、現場の方々が苦勞しながら様々な面で衛生管理を徹底してくれていることがわかった。現場を見て安心してもらうために、家庭教育学級の研修で第一子の新一年生となる保護者を対象とした見学会を開催してもよいのではないかと思った。学校への信頼にもつながる。また、小学生に子供が進学すると、お母さまのなかにはパートを検討する方もいる。給食センターの調理員に良い人材も集まるかもしれない。食物アレルギーを持つ子供への対応では、本市は現在除去食や代替食ができないが、アレルギーを持つ子の保護者との話し合いの場を持ち、できる範囲で対応していると聞いている。新しいセンターでは専用の調理室をつくる計画はあるのか。

学校給食課長：新給食センターでは、専用の調理室を設置し、除去食から始めて、最終的に代替食へ移行したい。

山 田：今現在アレルギーを持つ子供たちも食べられる給食を提供していると聞いたが、それができるのであれば、多様性の問題と位置づけ、自分自身で自分を守っていくという教育にもつながる。代替食ができることはよいことではあるが、できないことまでするのは違うと感じる。できることが何かを考えるべきである。栄養教諭の人数が半減することで、十分な食育ができなくなるようなら、市で充足するよう対応をお願いしたい。

市 長：栄養教諭の人数については、文科省や県の教育委員会で決められているが、改善を求めていく。難しい場合は市独自で対応するしかない。アレルギー対応についてはこれからも研究していく必要があるが、私自身は家庭に持たせることが一番良いであると考えているが、あり様を考えていく。

牧 田：先日給食センターを視察させて頂いた際は、職員の皆さんが時間内に分担して手際よく作業されている光景をみて感心した。食育では、栄養教諭の指導で、子供たちはいつも食べている給食の栄養や安全について勉強していた。栄養教諭の学校への積極的な参加は大変ありがたい。人数が減ると食育が難しいので対応をお願いしたい。

市 長：市長会を通じて県教育委員会へしっかり伝えます。

永 田：試食会では黙食はつらいと実感した。給食の材料で、例えば星形のニンジンが入っているなどの工夫があると子供たちも、ふふふと笑ったり喜んだりするのではないかと思う。牛乳のストローをマイストローとして持参することもよいかと思う。作業されている職員の環境整備をしてもらいたい。

野 中：様々な家庭の事情もあるだろうから、1日3食のうち、給食はきっちり栄養をとれるようにしたい。

市 長：委員から意見があったように、保護者に対して給食センターの在り方、あり様を知っていただくことで、お互いに理解を深めていく必要がある。そのような場を担当課として設定してもらいたい。また、センターで作業される調理員は不規則な時間帯にも関わらず大変努力してくれている。人材の確保は難しいので、待遇や環境改善に努めてもらいたい。また、新給食センターについては、全国から視察が来るようなものとなるようにしたい。